

第25回情報知識学フォーラム予稿

コロナ禍における研究集会 「学術野営 2020 in 奥州市」オンライン巡見に関する報告

Report on “2020 Academic Camp in Oshu City” Online tour : Research meeting in the age of COVID-19 pandemic

小川歩美^{1*}, 堀井美里¹, 堀井洋¹, 川邊咲子², 後藤真², 高田良宏³
Ayumi OGAWA^{1*}, Misato HORII¹, Hiroshi HORII¹, Sakiko KAWABE²,
Makoto GOTO², Yoshihiro TAKATA³

- 1 合同会社AMANE AMANE.LLC 〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117
〒921-8147 石川県金沢市大額2-44 N3ビル203
E-mail: oguchi@amane-project.jp
- 2 国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History
- 3 金沢大学 Kanazawa University
〒920-1192 石川県金沢市角間町
- *連絡先著者 Corresponding Author

コロナ禍においては、研究者が集まる学会やシンポジウムなどの学術イベントは現地開催が困難な状況にあり、オンライン上での試みが多く行われている。オンラインの学術イベントについては、感染リスクが低い状況で参加できること、さらにこれまで空間的・時間的制約により参加が困難であった参加者との議論が可能になったことが利点として挙げられる。一方で、直接交流し、体験することで行っていた課題・現状の共有や議論をどう行うかが課題となっている。

発表者らは、地域の学術資料の保存・継承・利活用について多面的かつ学際的な議論をする「学術野営2020 in 奥州市」を2020年7月10日(土)・11日(日)にオンラインで開催した。本発表では、学術野営2020における「オンライン巡見」を中心に、遠隔で参加者同士が課題や現状を共有し議論を行う学術イベントの実践に関する考察を行う。

In the age of COVID-19 pandemic, it is difficult to hold academic events such as academic societies and symposiums where researchers gather, and many attempts are being made online. The advantages of online events are that they can participate in situations where the risk of infection is low, and that it is possible to discuss with participants who had previously had difficulty attending due to spatial and time constraints. On the other hand, the issue is how to share and discuss the issues and current situation that were conducted by directly interacting and experiencing.

Presenters held "Academic Camp 2020 in Oshu City" online on July 10th (Sat) and 11th (Sun), 2020, for multifaceted and interdisciplinary discussions on the preservation, succession, and utilization of local academic materials. In this presentation, we will consider the practice of academic events in which participants share issues and current situations and discuss with each other remotely, focusing on "online tour" in academic camp 2020.

キーワード: 研究集会, コロナ禍, オンライン学術イベント, 学術資料, 議論

Research meeting, COVID-19 pandemic, Online academic event, Academic material, Discussion

1 はじめに

コロナ禍の現在，学会，シンポジウムなどの学術イベントは現地に研究者を集めて開催することが困難な状況にある。多くは中止，もしくはオンライン上の試みがなされている。オンライン開催の利点として，2点があげられる。

まず，感染リスクが低い状態で参加できる点である。コロナ禍では主催者側，参加者側は感染対策を講じることが重要である。オンラインは双方にとってリスクのない開催・参加が可能になる。

2点目に，今まで空間的・時間的制約で来られなかった参加者との議論が可能になった点である。多角的な議論が必要な研究集会において今まで接することが少なかった参加者との議論は重要である。また，移動時間を考慮する必要がないため，今まで参加しやすかった人もより多くの議論の場を得ることとなる。

一方，直接交流し，体験することで行っていた現状の共有や議論をどう行うかが課題となっている。オンラインでの議論はコロナ禍を機に積極的に行われたため，その手法は模索されている状況である。さらに従来は現地で実際に見学する巡見にて研究者が地域に集まることで直接現状を認識し，交流してきたが，コロナ禍では巡見は困難な状態にある。このような現状において，オンライン上でも課題をより現実的に共有する手法の検討が必要である。

以上をふまえ，本論では「学術野営 2020 in 奥州市」（以下，学術野営 2020）のオンライン巡見を中心に，遠隔で参加者同士が課題や現状を共有し議論を行う学術イベントの実践について考察

する。本論はオンライン学術イベントを新たな議論の場としてより有効なものとするを目的とする。学術野営2020は合同会社AMANE，国立歴史民俗博物館 [1]，奥州市教育委員会，えさし郷土文化館，金沢大学高田良宏氏科研[2]が共催となり，2020年7月11日（土），12日（日）に岩手県奥州市にて行われた。

2 学術野営 2020 in 奥州市

2.1 開催概要

「学術野営」は昨年から開催され，地域にある学術資料について多様な分野の参加者が自発的に議論し，現状・課題を共有することを重視している[3]。

2020年は岩手県奥州市にて行われ，総勢70名ほどが参加した。奥州市，国立歴史民俗博物館では一部の参加者が集まり，中継された。地震などの大規模災害（有事）と過疎化・人口減少（平時）による資料消失と資料の活用，奥州市の史資料の現状と課題，コロナ禍における資料保存・活用について議論がされた。

1日目は，まず奥州市のセッションとコロナ禍の資料保存についてのセッションが行われた。その後参加者は三つの

「座」に分かれ，それぞれ司会者となる「座主」が話題提供者とともに発表・議論を行った。「壺ノ座」は川内淳史氏（東北大学災害科学研究所）が座主となり有事の資料消失について，「式ノ座」では山内利秋氏（九州保健福祉大学）が座主となり日常的な資料消失について，そして「参ノ座」では原嶋亮輔氏（root design office）が座主となり学術資料の活用について議論した。座ごとの議論のあとは全体討論とし，日中の議論の総括

および今後に向けた意見を交わした。2日目の巡見は2.2にて詳細を述べる。

それぞれの議論はSNSにてハッシュタグをつけて随時発信することで可視化し、参加者が他の座の議論を確認しながら座同士を行き来できるようにした。

2.2 オンライン巡見

遠隔で地域の学術資料の現状を共有するために、学術野営2020では岩手県奥州市の牛の博物館、後藤新平記念館、えさし郷土文化館の3館を巡る「オンライン巡見」を実施した。本項では、撮影、編集、当日の実施について述べる。

まず、動画の撮影である。撮影は6月22日（月）に実施した。聞き手が学芸員から解説を受け、質問をする様子を2台のカメラで撮影した。1台は解説する学芸員を、もう1台は解説されている資料を中心に映した。撮影時間は、各館1時間半～2時間ほどである。

次に動画の編集・アップロードである。編集は映像の乱れをカットすること、2台のカメラの映像を1つの画面にあわせることを行った。編集を終えた動画は動画投稿サイトにアップロードし、URLを知っている者のみが閲覧できる状態で公開した。また、動画がそれぞれ長時間に及ぶため、目次を作成した。

当日は学芸員とともに画面共有で動画を解説した。副音声のようにリアルタイムで学芸員が解説を加えることで、参加者の質問にもその都度動画を停止して説明が可能である。また、実際の資料を持ち寄って解説する機会を設けた。資料は事前に募集し、今回は関東大震災、災害、検疫関係の資料が希望としてあがった。オンライン巡見は上記のような準備によ

って実施されたが、それらには奥州市と各館の協力が不可欠である。



図1 動画サイトにのせられたオンライン巡見の動画。説明欄に書かれた目次をクリックすることでスキップできる。

2.3 成果

本項ではオンライン巡見から、利点と改善点を見ていく。

利点は、資料についての情報を多くできることである。撮影時は時間をかけて解説ができ、当日は基本の展示解説に加え、参加者に応じた情報を追加することが可能である。また、カメラでの撮影は普段展示室での見学では見られない視点から資料を見せることができる。一方、情報量が多いため、聞く側はその情報を取捨選択する必要がある。そのため、目次の作成など聞く側が気になる点を選びやすい手段を講じることが重要である。

改善点として、発言・チャットによる質問や議論にて、発言者の偏りや司会者によるチャットの見逃しが見られた。発言の有無の偏りはオフラインの議論でもあり得ることである。しかし、オンライン上では人数も多く参加者同士の顔が見えないため、お互いの所属・分野などを把握しづらい。そのため司会者による議論の進行が中心になり、負担が増え、発言の有無の偏りが司会者・主催者の人間

関係に依存しやすかったと考えられる。

また、巡見の順序も考える必要がある。それぞれ1時間半～2時間の動画であるため、終盤にかけて聞く側・解説側が集中力を維持することが難しい。今回は牛の博物館、後藤新平記念館、えさし郷土文化館の順で行ったが、郷土の歴史全般を取り扱うえさし郷土文化館の解説を最初に行ったうえで他の2館の解説を行う方がわかりやすかった。

以上のことから、オンライン巡見は多くの情報を伝えられる一方、聞きやすくする工夫が必要である。議論では、司会者の進行が重要となるが、大人数の場合は参加者を把握しづらい。その結果、司会者の負担が増え、発言者が現実の人間関係に依存する可能性がある。また、豊富な情報を伝えられるオンライン巡見の実施には、自治体・館側の協力を得た上での事前の準備が非常に重要である。それらの関係性の構築にはオンラインだけでなくオフラインでの密なコミュニケーションが不可欠である。

3 考察

本章では巡見をもとにオンライン学術イベントの考察を行う。オンライン学術イベントでは、特に①参加者による積極的な議論が生じにくい、②事前準備・関係の構築、が重要である。

①について述べる。学術野営2020では、議論は発言の他にチャットの意見を司会者が拾い、発言を促す方式が多かった。司会者は進行と並行してチャットを確認することになり、チャットを見逃すことがある。オンラインでは司会者に負担が増加するため、発言の有無の偏りが

司会者・主催者の人間関係に依存しやすい。数人が分担して議論を進行していく対策が必要であり、加えてオンライン上でのコミュニティを今後どのように形成していくかが課題となる。

②では、従来のイベントに比べ遠隔で伝えるための準備が必要になってくる。その準備には、機材のほか現地に行き、関係者と密に交流することになる。また、注意喚起や要望募集など参加者とのコミュニケーションも重要となった。

4 おわりに

本論では、遠隔で参加者同士が課題や現状を共有し議論を行う学術イベントの実践について述べてきた。オンライン学術イベントは今までよりも多くの人々が安全に参加することが可能になった。一方、コロナ禍以前に構成されてきた関係に依存しやすく、オフライン下での事前準備に支えられている。実践的な議論と課題共有を行うためには、オフラインの役割を再認識し、遠隔でのコミュニティ形成について考える必要がある。

注記および参考文献

- [1] 国立歴史民俗博物館「総合資料学の創成事業」、人間文化研究機構「歴史文化資料 保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」。
- [2] 挑戦的研究(萌芽)18K18525, 基盤研究(B)20H01382.
- [3] 小川歩美;堀井美里;堀井洋;川邊咲子;後藤真;高田良宏「学術資料の保存・継承をテーマとした研究集会「学術野営2019 in 能登半島」に関する報告」, 情報知識学会, Vol. 29, No. 4, pp. 330-333, 2019.